

Title	バグビーとトインビー：文明の比較研究の方法論をめぐって
Sub Title	Bagby and Toynbee : on the methodology of the comparative study of civilizations
Author	堤, 彪(Tsutsumi, Takeshi)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1974
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.19 (1974. ) ,p.59- 73
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	原報
Genre	Technical Report
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000019-0059">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000019-0059</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バグビーとトインビー  
——文明の比較研究の方法論をめぐる——

堤 彪

BAGBY AND TOYNBEE

On the Methodology of the Comparative Study of Civilizations

TAKESHI TSUTSUMI

(Received September 30, 1974)

As is well-known, Toynbee's opus magnum, *A Study of History*, 12 Vols., 1934-61, is dedicated to the comparative study of civilizations. Against his expectations, however, he has had to face harsh and often unfriendly criticisms from all sides ever since the completion of the first ten volumes, the main body, of *A Study* in 1954. Of all the criticisms he has encountered, Philip Bagby's is perhaps the severest. For his is immanent: his only book, *Culture and History: Prolegomena to the Comparative Study of Civilizations*, 1958, was intended to put the study on a more rational and scientific base by criticizing his forerunners from the methodological point of view and Toynbee was his main target.

Bagby's intended criticisms and proposals found, to our surprise, a hearty and hospitable welcome from Toynbee. In the last volume of *A Study* titled *Reconsiderations* he appreciated positively Bagby's contributions to the study and referred to and quoted from his book more than 100 times, though Bagby didn't know this because of his untimely death soon after the publication of his book.

This essay is concerned chiefly with only two of the problematic points. One is the problem of the definition of a precise terminology in this field of study, for example, of the concepts such as 'civilization' and 'a civilization' and their related ones, and the other, the problem of the category of secondary or peripheral civilizations as opposed to major ones. Our observations will make clear after all what the true nature of Bagby's criticisms and proposals is and what they mean to Toynbee and the students who are interested in the comparative study of civilizations.

I

フィリップ・バグビー Philip Bagby は、その唯一の著書『文化と歴史——文明の比較研究序説』*Culture and History: Prolegomena to the Comparative Study of Civilizations*, 1958<sup>1)</sup> が出版された直後、40歳の若さで世を去った。世紀の大著『歴史の研究』*A Study*

of History, 12 Vols, 1934—61<sup>2)</sup>の著者アーノルド・トインビー Arnold J. Toynbee によれば<sup>3)</sup>、『タイムズ』紙が彼の死を報じた日は、奇しくもその『文化と歴史』の書評が『タイムズ文芸付録』に載った日でもあったという。したがって、彼は自分の処女作への反響も知ることなく不帰の客となったわけである。トインビーは彼の死を深く悼んで、この証言にこうことばを続けている。「これは人間事象の組織的研究者にとって思いがけぬ大きな損失であった。バグビーは非常に有能であるとともに非常に明晰な頭脳の持ち主であった。彼が通常为天寿を全うしていたら、世に出た彼の序説〔『文化と歴史』〕が約束していた、さらに大きな成果を達成したことであろう。私は彼の著作を、彼が私の著作を評価したよりもずっと高く評価している。バグビーの年令で死んでいたら、私は本書〔『歴史の研究』〕の最初の十巻の覚え書以上のものを何も残さなかっただろう。」

なぜ、トインビーはそれほどまでに、このいわば駆け出し者の早世を惜しんだのだろうか。この哀惜の念がたんに儀礼的なものでも、通り一遍のものでもないことは、彼がこれをわざわざ、『再考察』と題する『歴史の研究』第十二巻に注記したという一事からも、十分うかがえる。しかも、驚くべきことには、このバグビーたるや、トインビーにもっとも苛酷な批評を浴びせかけた論客の一人なのである。「トインビーはきわめて無分別で非科学的なやり方で彼の研究に着手することによって、文明の比較研究に大きな害を及ぼし、この企て全体の信用を失墜させることに力を貸してきた。シュペングラーと比較してさえ、彼は科学以前の道徳論的な歴史哲学の方向に一步逆戻りしている。〔『歴史の研究』の〕後の方の諸巻〔第七—十巻〕における黙示録的ヴィジョンが示しているように、彼はもともと予言者、それも〈近代ヨーロッパの歴史学徒〉の仮面をかぶった予言者なのである<sup>4)</sup>」とまで彼は言っている。しかも、これは戯れ言でも一時の思い付きでもない。というのは、彼は以前にも、『タイムズ文芸付録』に載せた『歴史の研究』の書評で、これとほとんど同じ主旨のことを述べているからである<sup>5)</sup>。そしてトインビーとしても、『付録』の慣例によって匿名で発表されたこの書評がバグビーの筆になることを、本人自身から確かめているのだから<sup>6)</sup>、バグビーの本心というか自分に対する敵愾心は、百も承知のことだったのである。

それにしても、このトインビー評は手厳しい。『歴史の研究』は、トインビーが最初にその構想を得てから、本論全体（第十巻まで）を書き上げるまでに、実に33年（1921—54年）も費やした仕事なのである。その上トインビー自身としても、この仕事には少なからぬ自信と自負の念を抱いていた。それなのに、バグビーは、この仕事がむだ骨折りどころか、この種の研究全体に大きな仇となったと言ひ、あげくの果に、トインビーに山師まがいのレッテルまで貼りつけたのである。こんな仕打ちを受ければ、いくら温厚で冷静をもって聞えるトインビーでも、内心穏かであらなかったのは当たり前であろう。彼は後になってから、息子との対話でその時の気持を率直にこう語っている。多くの批評家のなかでも、バグビーに対してはとくに激しい怒りを感じ、彼が自分を葬り去って、自分の代りになろうとしているのではないかとさえ思った、というのである<sup>7)</sup>。彼がひどく腹を立てたというのは当然としても、そのような、いわば被害妄想を抱いたというのは問題である。当時の彼がそれほどひどく打撃を受けていたとしか考えようがない。そしてそう解すのもあながち無理ではない。というのも、『歴史の研究』本論の最後の四巻（第七—十巻）が出版されて以来、彼は一息つく暇もなく、たえず激烈な攻撃の矢面に立たされてきたからである。文字通り四面楚歌であった。お義理でも祝辞の一つぐらひは言ってもらえるのではないかと

いう期待は空しかった。有名税とはいえ、攻撃の火箭はあまりにも激しかった。サマヴェル編の最初の六巻の縮冊版『歴史の研究』A. J. Toynbee, *A Study of History*, Abridgement of Volumes I—VI by D. C. Somervell, 1946<sup>9)</sup> が出版されて、彼が一躍有名になって以来、たしかに批評家たちの風当りは強くなっていた。だが今度の攻撃は、彼の予想をはるかに越えるものであった。それに加えてバグビーの追い討ちである。これでは、痛手を受けない方が不思議であろう。

しかしながら、トインビーはけっきょくこの打撃に耐えた。深手を癒す妙薬を手にしていただけからである。彼はかねがね、『歴史の研究』第十一巻『歴史地図』を完成したら、第十二巻『再考察』を書こうと考えていた。自説の再検討の必要性を感じていたのである。いよいよこれを実行に移す秋がきた。それには、浴びせかけられた批判を手がかりにするのが最善である。自分に欠陥があるにせよ、あるいは誤解されているにせよ、これだけ激しく攻撃されるからには、何はともあれ、自分にそう見えるところがあるにちがいない。ここでいたずらに自説に固執しても仕方がない。それよりは、聞くべきことには耳を傾け、自分に言い分があれば、それを率直に表明すべきではないのか。修正すべきは修正し、弁明すべきは弁明する。これ以外に自分の取るべき方策はない。そうトインビーは考えた<sup>9)</sup>。彼には、どんな批判をも風に柳と受けながし、大家の安逸を貪るなどといった芸当は無理だった。自説に徹底した反省を加える以外に、彼は厳しい批判に耐え、試練に耐える術を知らなかったのである。

そう悟ると、彼は精力的にこの仕事に取り組んだ。深く自己に沈潜し、いわば他人の目を通して客観的に自己の仕事を検討していった。この作業の効果と意味は絶大であった。学問的な意味でも、また一人の人間としても、彼がこの再考察から得たものは計り知れまい。彼の心がやがて批評家たちに対する感謝の念で満たされていった<sup>10)</sup> としても、不思議ではなからう。というのは、そのような厳しい批判、往々にして敵意すら感じられる酷評に会わなかったら、どれほど反省心に富む者でも、それほど徹底して自説を再検討する機会を得られなかったらと思われるからである。彼らはいわば「精神的マッサージ」を施してくれたのであり、精神の死から彼を救い出してくれたのである。

その意味では、バグビーは若輩とはいえ、そして若輩であるが故にいささか猪突猛進のきらいはあったかもしれないが、おそらくトインビーが真先に感謝しなければならぬ相手だったろう。なにしろ、トインビーをもっとも激しく怒らせ、彼にもっとも深い痛手を負わせたのがバグビーだったからである。もしかすると、トインビーに『再考察』執筆の決定的なきっかけを与えたのも、彼だったのかもしれない。その可能性は十分に考えられる。だが、それはいずれとしても、トインビーが最大級の関心を払った相手がバグビーであったことは、まちがいない。というのは、『再考察』の「索引」を見ればわかるように、そのなかでのバグビーへの言及や引用は、ちょっと数えてみただけでも、優に百回を上回っているからである。しかも、こうした言及や引用は、本書のほぼ全般にわたっている。トインビーを批判した者のなかで、これほどの扱いを受けたのは、バグビー以外には一人もいない。この事実は、そのまま、彼がトインビーにとっていかに大きな存在、いかに好敵手であったかを有弁に物語っている。それというのも、彼は他の多くの批評家たちとは違って、攻撃の矢をトインビーの急所に射込んできたからである。彼の矢は的外れではなかった。狙いはびたりと合っており、いささかも狂ってはいなかった。実に手強い相手だった。

それもそのはずである。彼はトインビーと同じ問題意識の上に立っていたからである。彼にはトインビーの手の内が手にとるようによく見えていた。それだけにまた彼は、なおさらのことトインビーの大まかさ、学問上の基礎的装備のずさんさには目をつぶれなかったのである。彼はすでに『タイムズ文芸付録』の書評でも、次のように述べていた。「トインビー博士の中心命題を評価し、その経験的妥当性を検証しようとする、われわれは自分の引き受けた課題が実践不可能であることに気づく。彼の主要概念はどれ一つとして、十分よく定義されていないので、われわれはそれがいつ当てはまり、いつ当てはまらないかを判断することができない<sup>11)</sup>。」基礎工事がこんなはずさんでは、文明の比較研究という折角の試みが不信を招いても当たり前だというわけである。このことばの裏には、トインビーがもっと明確に基礎的概念を規定し、もっと科学的な研究の進め方をしてくれてさえいたら、という苛立ちの気持がある。

この苛立ちがやがて爆発して、前に引用したトインビーへの酷評となったのである。トインビーはとんでもないことをしてくれた。文明の比較研究という沃土に目を付けながら、ろくな農具ももたずにこの沃土に立ち向かったため、大した収穫も得られないで地価の下落を招く結果となった。これを黙って見過しているわけにはいかない。土地そのものに咎はないのだ。農具と耕作法さえしっかりしていれば、収穫は大きい。それをはっきり証明してみせなければならない。これがバグビーの気概であり、『文化と歴史』執筆の真の動機であった。だから、その意味では、この本で直接トインビーに言及している箇所はそう多くはないが、全篇がトインビー批判であるといってもけっして過言ではない。この先輩の欠陥を正し、文明の比較研究を不信から救い出さなければならないという決意が、「文明の比較研究序説」の全体に漲っている。そしてこうした意図に着目したとき、認識＝方法論的な観点から歴史論、文化論、それらの総合としての文明論へと論点を進めていく本書の構成や、神経質ともいえるほど入念な基礎的概念の規定の意味が、もっともよく理解されよう。

トインビーには、バグビーの意図がすぐにわかった。歴史哲学的な反省の上に立ち、文化人類学という新装備で武装したこの若者の攻撃は、一々思い当たるところがあった。さしものトインビーが冷静さを失い、自分の地位が脅かされるのではないかという危惧を抱くほど、急所を衝いていた。精神的に深い打撃を受け、冷静さを欠いていたとはいえ、トインビーの危惧はまったくの妄想でもなかった。バグビーの態度や気構えには、たしかに十分それを感じさせるものがあった。だが、トインビーは怒りにまかせて、ただちに目には目、歯には歯式の反撃はしなかった。少し冷静になってみると、彼には、バグビーの攻撃の鋭さがどこから来ているかがはっきりわかった。彼の批判は内在的批判なのである。道理で痛いところを衝いてくる。彼は自分と同じ問題意識の上に立ち、自分と同じ目標を追いかけているのだ。少々失礼な奴だが、彼こそ自分が待ちのぞんでいたよき競争相手、うまくいけばよき協力者となってくれる人物ではないのか。意識の鮮明さといい、力量といい、自分が亡き後安心して後事を托すに足る相手だ。トインビーはそう感じた。『再考察』でのバグビーへの言及には、しばしばこうした気持がにじみ出ている。君の装備は素晴らしい。だが、完全とはいえない。同じ目標に向っているのだから、君だって私から得るところがないわけでもなからう。お互いに是は是、非は非としながら、協力し合ってやっで行こうではないか。トインビーはバグビーにそう語りかけていたのである。

だから、トインビーとしては、多くの批評家のなかでも、まず第一番に『再考察』を読んでもらいたかった相手が、バグビーだったのである。だが、彼は本書の公刊を待たずに世を去った。

その報に接したとき、トインビーはおそらく愛し子を失ったようなショックを受けたことだろう。バグビーは本格的な文明論者、文明の比較研究者たらんとしており、この意味でまさしくトインビーの正統的な後継者たるにふさわしい資格を十分に備えていた。トインビーにとって、彼は次代の文明論の担い手と目される者のなかでも、もっとも将来の期待しうる後継者だったのである。

## II

トインビーの歴史観は、通常、文明史観と特徴づけられる。国家や民族という単位によってではなく、彼が文明という単位によって歴史的出来事を考察するからである。彼自身、文明を「理解可能な歴史研究の分野」と定義していることは、あまりにも有名である。彼はこの定義によって言わんとするところを、『歴史の研究』の「序論」のなかで、イギリス史を例にとりながら次のように説明している<sup>12)</sup>。イギリス国民の歴史は、イギリス史の枠組のなかだけではとうてい十全な理解には達しえない。アテナイ史やスパルタ史がギリシア文明という全体社会の歴史の一部として理解されるのと同様、イギリス史もヨーロッパ文明という全体社会の歴史の枠組のなかで、はじめて真の姿を現わすのである。時間的および空間的に一定の拡がりをもったこの全体、いわば歴史的個体の存在にしっかりと目を据えて見なければ、イギリス国民の演じた人間ドラマが歪んで見えてくることは必至である。そしてこのような全体社会は、ヨーロッパ文明以外にもいくつもあつたし、またある。これらの文明社会の比較研究、こうした全体社会の時間および空間における出会いのドラマの研究を通して、はじめて全人類の歴史過程、世界史の構造と変動が明らかになってくる。

とはいうものの、トインビーの文明の定義は、定義としてはいかにも不完全で不十分である。たとえ大半が揚げ足とりに類するものにすぎないとはいえ、この定義に多くの批判が集中したのも故なきことではない。だが、なによりもまず『歴史の研究』の内容が明示しているように、トインビーには文明という実在、換言すれば、個々の樹木ではなくて森林の全体が見えていたのだから、この点に関しては、比較文明論的な観点に立つ歴史学者ラシュトン・コウルボーン Rushton Coulborn のように好意的な受け取り方をするのが正当であろう。ちなみに彼は、梅棹忠夫の「文明の生態史観」に重要な論拠を提供したと考えられる封建制の比較研究 *Feudalism in History*, 1956 の組織者・総括者であり、文明の起源に関する研究 *The Origin of Civilized Societies*, 1959 によって「トインビーのもっとも弱い文明の誕生論をすっかり書きかえた<sup>13)</sup>」とさえ評される学者である。彼はトインビーの定義について次のような判断を下している。「私はトインビーの大まかさも、原理的には正しいと感じている。用語の使い方には多くの矛盾したものがあるのだから、むしろ歴史的な定義を試みるのが実際のだと私は思う。つまり次のような定義である。文明社会とは、第四氷河期の終わりの特殊な気候条件が原因となって生じ、それ以前の未開社会や現存している未開社会よりもはるかに大きな規模をもつ社会であり、これらの社会はすべて未開社会から派生したものである。この種の定義は、トインビーの用法に合っており、それに暗に含まれているということができよう<sup>14)</sup>。」彼がこのようにトインビーに好意的だったのは、トインビーの企ての正当さ、問題意識の重要性を十分に理解していたからにはかなるまい。

しかしながら、トインビーの文明の定義にまつわる問題性はこれに尽きない。バグビーはこの

点に触れ、トインビーの定義は不十分なだけでなく、「第一巻の最初の二、三頁で暗黙のうちに放棄されている<sup>15)</sup>」と指摘している。この「第一巻」という言い方は紛らわしいが、これは『歴史の研究』第一巻のことではなく、本論最後の四巻（第七十巻）中の第一巻、つまりは第七巻のことであり、彼はこの指摘によって、トインビーがこの最後の四巻に至って歴史研究の立場を変えた、という事実を衝きたかったのである。この事実は多くの論者によって指摘され、また後にはトインビー自身もこれを認めている。「私自身、本書〔『歴史の研究』〕は人間事象の分析＝分類的な比較研究として始まり、途中でメタヒストリカルな探求に変わった。といたい<sup>16)</sup>。」これは、トインビーが事実の探求、経験的な研究から意味の探求、歴史形而上学的な研究に主眼を移したということであり、彼自身が歴史学者から歴史哲学者に変身したということの意味する。

この変化は、すでに『歴史の研究』第五巻のなかに予示されていた。すなわち「〔世界〕教会は、歴史的には最初、文明のなかに出現するけれども、本当に文明史の枠組のなかで完全に理解しうるのだろうか<sup>17)</sup>」という疑問がそれである。トインビーは、シュペングラー Oswald Spengler とは違って、かならずしも最初から、文明をそれ自体で完全に自己完結したものと考えていたわけではなかった。けれども、高度宗教の誕生という事態に直面したとき、彼はそれが特定の一文明の枠内で理解しうるものではないと、ますます深く感じるようになった。これは文明の内的展開のドラマではない。いくつかの文明の出会い、文明間の闘争や葛藤のドラマと解されなければならない。そう気づいたとき、彼の心には、文明と宗教との間の位置づけの問題が生じ、それと共に彼の関心は、次第に文明の意味づけ、ひいては文明の救済の問題、そしてさらには宗教そのものへと移っていった。

だが、だからといって、トインビーが文明の歴史にまったく関心を失って、宗教だけを論じるようになったと言おうとしているのではない。たしかに高度宗教への関心は増した。だが、文明の歴史への関心もいぜんとして失われてはいない。要は関心の比重、文明への視角が変わったということなのである。この変化は「文明中心の思考」から「宗教中心の思考」への移り変わりとも特徴づけられよう<sup>18)</sup>が、『再考察』における文明の再定義の試みは、これをなによりも如実に反映している。彼は今度は、文明を「精神的な観点から」定義し直そうとして、こう述べている。

「おそらく文明とは、万人を包含する単一の家族の成員として、人類全体が仲よく一緒に生活しうる社会状態を作り出そうとする努力である、と定義してもよかろう。これこそ、これまでに知られているすべての文明が、意識的ではないまでも、無意識的に目指してきた目標である、と私は信じる<sup>19)</sup>。」これは明らかに経験的な定義ではない。目的論的な定義とでもいべきものであり、未来志向の定義である。したがって、ここでは、文明への視角が過去から未来へと大きく百八十度の転回をしていることが確認される。

上述したバグビーの指摘は、この事実を鋭く剔出していたのだが、彼のトインビーに対する酷評も実は深くこの点に関わっている。それというのも、彼は生前この視角の変更をけっして容認しようとはしなかったからである。彼はより合理的、より科学的な歴史理解を目指して、あくまで経験的な観点から文明の比較研究を押し進めようとしていた。文明の発展には規則的なパターンがあるというトインビー（そしてまたシュペングラー）の命題には問題がない。この命題は「けっして客観的な経験的研究を受け止めてきたわけではないけれど、この命題にはたしかにある種の明証性があるように思われる<sup>20)</sup>」からである。問題はむしろ、トインビーが文明の歴史を

道徳的な観点、神義論的な観点から見ようとするところにある。こうした観点に立つかぎり、いかに優れた歴史洞察もお説教じみ、客観的・経験的な歴史研究の邪魔になるだけである。より合理的な歴史認識を得ようとするならば、歴史研究はあくまで経験の世界に踏み止まらなければならない。バグビーはそう確信していたのである。

それでは、バグビーは文明をどう定義しているのだろうか。彼はシュペングラーやトインビーと同様、文明の発展には規則性があるのかという問題と取り組むために、あらかじめしっかりした概念的枠組を準備しておくのが『文化と歴史』執筆の目的だと明言するだけあって、文明の定義をするに当たってもきわめて用意周到である。文明の歴史の客観的な理解にとってなぜ文化の概念が重要かを説明した後、彼はまず文化を定義してから、文明の定義に移る。したがって、われわれもまず彼の文化の定義を先に取り上げなければならない。

バグビーは文化を、「起源が明らかに遺伝的である規則性を除いた、社会の成員の内的および外的行動における規則性」と定義している<sup>21)</sup>。この定義は諸先達の文化の定義を参考にしながら<sup>22)</sup>、熟慮と厳密な手続きを経て得られた定義である。トインビーはこれを、アメリカ人類学の泰斗A・L・クローバー Kroeber の挙げた四つの「文化の性質<sup>23)</sup>」(トインビーの叙述では「四点から成る定義」と比較し、そのうち三点がバグビーの定義と合致しているという。その三点とは、文化は遺伝の発生的メカニズムによってではなく、接合子の相互条件づけによって伝達され維持されるということと、文化は個人に起源をもつものであっても、急速に個人性を失って創造者不明のものになる傾向があるということと、文化は形態や様式や意義のパターンないしは規則性を示すということである。だがトインビーは、バグビーが残る一点、すなわち文化は価値を具現化するというクローバーの言明を拒否している理由が納得できないという。そして「私自身の定義を作り出すさいには、これをバグビーの定義につけ加えたい<sup>24)</sup>」と付言する。

しかしながら、バグビーは定義の同質性を確保するために、価値的観点を文化の定義のなかに持ち込まなかったのである。彼は熟慮の末にそうしたのであって、価値的観点が文化の研究にとって重要なことは十分に承知していた。それというのも、彼はある文化と他の文化を分ける基本的なものが「観念と価値」、わかり易くいえば「考え方や感じ方」であり、実際に二つの文化を区別するには、このような「基礎的観念や基礎的価値が表現されている典型的な諸制度」に着目すればよい<sup>25)</sup>、と述べているからである。彼は定義の同質性に関わる問題と、異文化間の区別に関する視点を混同してはならない、と考えていたのである。これは、後に触れるように、彼が一般概念としての文化と一つの統合体としての文化を明確に区別しようとしていたからにはほかならない。

バグビーはこの文化の定義に基づき、文明という語の語源的派生を手がかりとして、文明を「都市に見出される種類の文化」、より端的には「都市の文化」と定義し、その「都市」を「居住者の多く(またはもっと正確に言って大半)が食糧生産に従事していない住居の集り」と定義することを提案する<sup>26)</sup>。この簡単な定義もまた、人口の大きさ、分業、文字の有無といった通常よく提出される文明の定義の基準を十分に検討した上で下された定義である。この定義の意味や含蓄は、次のようなことを合わせ考えてみれば、いっそうよく理解できよう。たとえば、レッドフィールド Robert Redfield が、「行政的エリート」や「読み書きのできる聖職者」や「専門化した職人」が最初に現われたのが都市であったということを理由として、文明と都市の勃興とを同一視している<sup>27)</sup>ことや、バグビーが「農業共同社会はすべての文明の必要な一部ではある



## No. 19 (1974)

が、その性格は、文化的に都市に依存するようになったという事実によって実質的に変わっている<sup>28)</sup>」と述べていることなどである。

トインビーは、バグビーがそのように「都市の役割に重要性を与えている」点を高く評価する。そして「バグビーの定義はもう少しで的に命中するところである」ことを認めるけれども、まだ十分ではないという<sup>29)</sup>。彼としては、文明の目標は何か、文明はいかにしておのれを救済することができるのかという観点が、バグビーの定義に欠けていることが気にいらないのである。それだからこそ彼は、次のようなドーソン Christopher Dawson の主張やホワイトヘッド A. N. Whitehead の言明を援用しながら、先に述べたように「精神的な観点から」文明を定義しようとしたのである。すなわち、「あらゆる文明の背後には一つのヴィジョンがある<sup>30)</sup>」というドーソンの主張や、「世界において高度の活動によって目立つ各時代には、その頂点やそれを作り出した作因のなかに、暗黙に受けいれられているなんらかの深遠な宇宙論的な見方が、その時代の行動の源泉の上にそれ自身の刻印を残しているのが見出されよう<sup>31)</sup>」というホワイトヘッドの言明である。

けっきょくトインビーは、バグビーのように、経験的で合理的な基盤の上には踏み止まっていられないのである。文明の目標に対する関心があまりにも強烈だからである。これでは、彼がバグビーの定義に不満を感じるのも無理ない。しかし、バグビーの立場に立つかぎり、彼はその定義になんかの欠陥も発見していないはずだから、その範囲内では、バグビーの定義の有効性をほぼ全面的に認めているといっても間違いではなかろう。それに、おそらく彼は、実際的な研究の過程では自分の定義よりはむしろこの定義に従わざるを得まい。それというのも、彼の目的論的な定義が実際的な研究にとって、どれだけ有効かはきわめて疑わしいからである。ついでに言えば、トインビーの最初の定義は、文明という語の定義というよりはむしろ歴史研究の対象の設定といった性質のものであろう。

ところで、これまで扱ってきたのは、実は一般概念としての文明（や文化）の定義にほかならない。バグビーは、この上さらに、たとえば「一つの文明」とか「諸文明」という場合のように、有機的統合体としての文明の概念を規定しておく必要があると主張する。もちろん文化の概念の場合も事情はまったく同じことである。従来、文化や文明に関する論述にしばしば混乱や曖昧な点が見られたのは、おおかた文化や文明のこれら二つの概念を明確に意識して区別しなかったためである。だが、いつまでも文化一般や文明一般に妥当する概念と有機的統合体としての文化や文明の概念とを混同し続けること、換言すれば、抽象概念と具象概念との区別を曖昧にしておくことは許されない。この区別は、いうまでもなく本質的に異なる二つのものの間の区別ではありえないが、機能上いちじるしく異なる概念間の区別であり、必要な区別である。一方は文化や文明の共通性に、他方は文化や文明の異質性に関わる概念だからである。この概念間の違いは、英語ではそれぞれ端的に、culture と a culture または cultures との相違、civilization と a civilization または civilizations との相違として区別される。トインビーも英語使用国民の一人として当然この区別にはなじんでいるが、バグビーほど強烈な方法論的意識はもっていない。

バグビーは上に述べた一般概念としての文化と文明の定義に基づいて、これもまた熟慮と厳密な手続きを経て、それぞれ、一つの統合的全体としての文化を「地方的共同社会の一グループに見出される文化的規則性の集合体」、より専門的には「地方的共同社会の一グループに現われて

いる文化特質と文化複合との集合体」と定義し<sup>32)</sup>、一つの文明を「都市が見出される一つの〔統合体としての〕文化」と定義する<sup>33)</sup>。ここで「地方的共同社会のグループ」という表現は、具体的に何を指しているのか、わかりにくいかもしれないが、未開のレベルでは部族を指し、文明のレベルでは民族ないし国民を指している。それぞれ部族や民族に文化統合の一次的様式が確認されるからである。

以上述べてきたことから明らかなように、バグビーはこと研究の主目的に関わる用語の定義に関して、必要以上と思えるほど厳密で用意周到である。この点では、トインビーはどうみても遠く及ばない。だからこそトインビーはバグビーに脱帽し、これを真正面から受けとめたのである。論者のなかには、バグビーの定義は不自然だと評する者もいる<sup>34)</sup>が、原則的にいって、筆者はバグビーの行き方が正当であると考えている。

### III

トインビーがバグビーの批判や提案を真正面から受け止めたのは、定義の問題に関してだけではなかった。しかし、こうした批判や提案のうちで、トインビーにとって、そしてまた文明の比較研究に関心を持つすべての者にとって、とくに重要なのは、なんといいてもバグビーによる「周辺文明」の提唱であろう。

トインビーは周知のごとく、以前には二十一ないし二十三の文明、より正確には「十分に開花した文明」、を数え挙げていた<sup>35)</sup>。だが、この数は異常に大きい。それというのも、トインビーの場合、孤独な先行者N・ダニレーフスキー Danilewsky と比べても、あるいはまた先生格のシュペングラーや同僚格のアルフレート・ウェーバー Alfred Weber と比べても、その数がほぼ二倍前後に達しているからである<sup>36)</sup>。しかも、トインビーはこれらの文明がすべて「哲学的に等価」、いわば同格・同等であるという<sup>37)</sup>。この点にも多くの論者、とくに事情に明るい論者の関心と批判が集まった。彼らの批判の多くは、トインビーが文明を設定するに当って、基準を明示せず、またあまりにも主観的で恣意的だという点で一致している。たとえば、近東地域の考古学の大家W・F・オールブライト Albright は、トインビーの文明設定の基準には一貫性がなく、事例によって物質文化によったり、宗教によったり、人種によったりしていると非難している<sup>38)</sup>。バグビーはもっと苛酷である。彼は、トインビーの文明表がいわば両立や比較の不可能ながらくたの「奇妙な寄せ集め」だと言い<sup>39)</sup>、これで文明の比較研究とはおこがましいと言わんばかりである。しかしながら、いくら彼が独創的であっても、トインビーのルーズな文明設定の見本がなかったら、「周辺文明」の存在、つまりは諸文明を「大文明」ないしは「一次的文明」と「周辺文明」ないしは「二次的文明」との二つのグループに大別しなければならないことには、思い至らなかつたろう。とすれば、トインビーはいわば反面教師としてであれ、バグビーの大恩人だったわけである。

ところで、バグビーはどんな文明を大文明とし、どんな文明を周辺文明といったのだろうか。まず彼のいう大文明を列挙してみよう。エジプト、バビロニア、中国、インド、古典〔古代〕、ペルー、中米、西欧、それに近東の九文明である。論者によっては、これらのうちバビロニアはメソポタミアと呼ばれ、古典はギリシア＝ローマ、ペルーはアンデスと呼ばれる。バグビーによれば、この九文明のうち近東を除く八文明は「かなり明確に規定されており、一般に認められている<sup>40)</sup>。」事実、文明の名称や数や出入りに多少の差はあれ、トインビーを除けば、実質的にい

って上述の論者たちの間では、それぞれ取り上げている文明がかなりよく一致している<sup>41)</sup>。たとえば、シュペングラーの場合、バグビーの中米はメキシコ、近東はアラビア（マグス）という名称になっているが、それ以外には新大陸のペルーが欠けているだけである。それに、問題のトインビーの場合にしても、彼の設定した文明を少し立入って吟味してみれば、バグビーの場合と実質的にはそう大差がなくなる。というのも、彼の場合、バグビー流に言えば、一つの文明を二つや三つに分けたり、周辺文明を大文明の中に混入したりしているために、文明の数が異常に多くなっているにすぎない。これらの文明は、バグビーの整理の仕方によれば、けっきょく「九つの大文明と二つの大文明かもしれぬものと二つの二次的文明とに帰せられる<sup>42)</sup>。」ちなみに、ここで「二つの大文明かもしれぬ」といわれているのは、彼が暫定的考察の過程で一応は周辺文明に入れながらも、最終決定を保留していた日本文明とロシア文明のことである。

したがって、バグビーは、文明を設定するさいにトインビーが彼のように明確な基準さえ持っていれば、彼と同じような結果に達したにちがいないと言っているのである。トインビーはこの点では先行者のシュペングラーにも及ばない。彼の文明表は一見シュペングラーの文明表を大幅に修正し精密にしたように見える。だが実はこれが改悪だった。トインビーの文明表は、文明設定の基準もなく恣意的に作製されたもので、知見の単なるひけらかしにすぎない。その点シュペングラーはもっとしっかりしていた。「彼の文明表は事実上われわれの文明表とほとんど同一であり、このことは、彼が無意識ないし直観的に、われわれ自身の基準にきわめて近い基準を使っていたにちがいないということを示唆している<sup>43)</sup>。」それにひきかえ、トインビーがシュペングラー以降急速に増大した知識を、ただ無反省にシュペングラーの文明表に投げ込んで能事終われりとしたのは許せない。彼は当然、周辺文明の存在に気づいてしかるべきであった。バグビーの挑戦は手厳しい。

しかしながら、バグビーはトインビー追撃に急なあまり見落していたのだろうが、実質的な意味では、トインビーも周辺文明の存在に気づいていなかったわけではなかった。彼はかねて自分の設定した文明や文明のある種の局面に何か割り切れぬものを感じ、これらを文明の本体の「わかれ」とか、文明の「化石」とか、あるいは文明の「編入」といった概念で扱っていたからである<sup>44)</sup>。彼は彼なりに思い悩み、苦闘を重ねていたのだが、それらを総合しうるもう一つ高次の「二次的文明（周辺文明）というカテゴリー」に達しえなかつただけなのである。だから、トインビーには、バグビーの周辺文明提唱の意義がすぐにわかった。いままでどこかおかしいと思いつながら、あまり関連なくそれぞれ別個の問題として追求してきたものが、突如として関連をもち、一つのものにまとまった。そこには不自然なものはなにもなかった。でなければ、トインビーが『再考察』で<sup>45)</sup>論証らしい論証も、また説明らしい説明もしないで、いきなり、バグビーの大文明を「独立文明」と、周辺文明を「衛星文明」と言い換えただけで、彼の従来文明表を全面的改正といってもいいほど大幅に修正した理由は、とても理解できない。理由らしいことといえば、わずかに「というわけで、諸文明をその相対的な価値に従って分類しようとするどんな試みにも、主観的な判断が一杯入ってくるだろう。われわれは、何か客観的な基準を見つけだせなければ、無理してこの分野に入っていくても有利でもなければ、また安全でさえもありえない。この基準はバグビーの提唱した＜二次的で周辺の＞な文明と＜大＞文明との区別によっては満たされない。だが、他の文明の＜衛星＞である文明と、同時代の他のいかなる文明からも独立している文明とを客観的に区別することなら、可能だろう<sup>46)</sup>。」と、あまり要領の得ないことを言っ

ているだけである。名称さえ変えれば、客観的な区別が可能になる、と言わんばかりである。だが、それ以外には、彼はその「客観的な基準」が何かについても、また衛星文明が何かについても、実質的なことは何一つ述べていない。その必要も感じられないほど、トインビーにとっては衛星文明の設定は自然なことだったのである。

この「改定文明表」には、「十分に開花した文明」として、独立文明が十三、衛星文明が疑問符のついた三文明を含めて十五挙げられている。『歴史の研究』の新改訂・縮冊一巻本である『図説歴史の研究』*A Study of History Illustrated*, 1972では<sup>47)</sup>、この文明表に新しい独立文明が一つ、新しい衛星文明が二つ（一つは疑問符つき）つけ加えられている。したがって、トインビーの最新の文明表によれば、独立文明が十四で衛星文明が十三ないし十七ということになる。これは以前の文明表からすれば、まったくの面目一新である。そこでは、バグビー流に言えば、大文明が九つで、周辺文明が、大文明らしいものを含めても四つだったからである。トインビーの最新の文明表中の十四の独立文明にしても、バグビー流に言えば、おそらく九つの大文明と三つの周辺文明とに分類されよう。とすれば、トインビーの最新の文明表には、彼のいう衛星文明をすべてそのまま承認した上でこの表をバグビー流に改変するなら、合計二十の周辺文明が含まれていることになる。

しかしながら、この数は、その中にバグビーがまったく知らない新顔の文明を少くとも四つは含んでいるのに、彼の挙げた周辺文明の数と比べるとかなり少ない。バグビーはまずは「二次的文明というカテゴリー」の設定が当面の問題で、これに属する文明の確定は将来に待たねばならぬと断りながらも、ほぼ三十の事例を列挙している<sup>48)</sup>からである。その新顔の四文明を別とすれば、トインビーの衛星文明の中には、バグビーでは大文明の一部として扱われていると思われるものが若干あるけれども、残りはだいたいバグビーの周辺文明の中に含まれている。というわけで、両者をつき合わせてみると、トインビーの文明表の中であって、なおかつバグビーの周辺文明に含まれる、ないしは含まれると思われるものは、独立文明中のエーゲ海、インダス、アフリカの三文明と衛星文明中のエラム、ヒッタイト、イタリア、朝鮮、日本、ヴェトナム、東南アジア、ティベット、ロシア、遊牧の十文明である。このうちヴェトナムと東南アジアは、それぞれバグビーのアンナンとマラヤ＝インドネシアに相当し、アフリカとイタリアと遊牧の三文明は、部分的にしか一致しないものもあろうが、それぞれバグビーの西アフリカとエトルリアとトルコ＝タタールの三文明に相当するものと思われる。

これだけでも、周辺文明の輪郭ないしイメージはかなりはっきりしてきたことだろう。だが、バグビー自身が周辺文明を実際にどう特徴づけているのか見てみることにしよう。彼によれば<sup>49)</sup>、周辺文明とは「ある近隣の大文明の特徴のいくつか、とくに芸術様式や技術を借用しながらも、基礎的制度の目録全体を採用してははず、したがってその大文明の一部とは分類されえない（都市を含む）文化」のことである。こうした文化すなわち周辺文明の諸特徴の中には、土着的なものがかなり含まれており、ことによっては近隣の大文明に借用されるものさえある。したがって、周辺文明には相当の独創性をもっているものもあるわけである。しかしながら、決定的なことは、それが基礎的制度、換言すれば基礎的な諸観念や諸価値を具現化している典型的な制度のいくつかを大文明から借用しているという点にある。土着のものだけではやっていけない。けれども、土着のものをすべて失ってしまったわけでもない。それは大文明ではないが、さりとて大文明の一部でもない。とすれば、それは当然、大文明とは異なる、別個の独自の文明として

取り扱われなければならない、こうした文明の存在や特徴を理解しようと思えば、われわれは身近な例として、西洋化の過程にあるわが日本文明の現状を思い浮かべてみればよい。

バグビーはさらに周辺文明を大文明と比較してみて、次のような点に特徴があるとしている<sup>50)</sup>。すなわち、周辺文明は全体として大文明よりも寿命ないし持続期間がずっと短いという点と、それには大文明の場合の発展を反映するような、基礎的制度のなんらの発展も見られないように思われるという点と、それは概して独創性がないように見えるという点である。これら三つの特徴ないし相違は、暫定的なものにすぎず、その意味でもちろん完全なものとはいえないが、大文明と周辺文明とを客観的に区別する基準として、かなり有効であるように思われる。たとえば、ヨーロッパ文明や中国文明とティベット文明や朝鮮文明との違いを考えてみればよい。少くともこれらの文明間の落差ははっきりと浮かび上がってこよう。そしてそのさい、それらの基準がこの落差をはっきりさせるのに役立つことが確認されよう。とすれば、トインビーが先程の引用で、バグビーには大文明と周辺文明とを客観的に区別する有効な基準がないといっているのは不当ということになる。

ところで、これまではその輪郭をはっきりさせるために、大文明であれ周辺文明であれ、文明をすべて固定的、静態的に取り扱ってきた。だが、あらゆる文明は本来、変動するものであり、その意味で動態的に扱われるのが本当である。幸いいまはもう一応、大文明と周辺文明との区別ははっきりしたのだから、ごく大ざっぱではあれ、この面についても少し考察を進めてみよう。身近で具体的な例がある方がわかりやすいから、日本の場合を中心として見ていくのが便利だろう。ここで思い出していただきたいことは、バグビーが日本文明をいったんは周辺文明としながら、大文明かもしれぬと態度を保留したことである。この場合、まず、少くとも周辺文明というカテゴリーを承認するかぎり、日本が中国文明の周辺文明として文明の歴史を始めたという点については異論がなかり。それというのも、日本が中国化、すなわち中国から政治制度やその他の文物を採り入れることによって文明に達しながら、中国文明の一部とはいえぬ独自性を保持していたことは明らかだからである。われわれの祖先はたしかに独力で未開から文明への道を切り開いたのではなかった。だが、彼らは中国文明の一部に編入され、同化・吸収されてしまうこともなかった。この点では朝鮮もヴェトナムも同じことである。このように未開から周辺文明になるという変動は、未開と文明との文化接触による文化変化の一パターンである。このような場合には、現在消滅しつつある多くの未開社会にみられるように、文明への同化・吸収というパターンもある。

次は、日本文明が大文明かもしれぬという点である。すでに周辺文明になったということが確認されている以上、これは日本文明があるとき大文明になったかもしれぬということにほかならない。バグビーはこの論拠として、日本には封建制や商人階級の勃興などを含む社会制度の独自の発展が見られるようだということを指摘しているにすぎない<sup>51)</sup>が、この論点については、山本新がもっとはるかに詳しい論究を試みている<sup>52)</sup>。彼は九世紀末に日本文明が独立したといえるのではないかという想定の上に立って、天皇名の和風化、遣唐使の廃止、律令体制の変質、仏教の土着化の開始、芸術様式の国風化、仮名の発明などの諸点を検討し、さらにこれを補強しようとして、「中国文明への依存度」という観点から日・朝両文明の比較考察を行ない、「以上の考察と比較から日本文明は独立文明といえそう」だが、「他の文明に影響を与えるような大思想体系とか大芸術様式をもっていない」、「大文明にしては、小づくりであり、創造性が稀薄である」と

いうことを論拠として、日本文明を「大文明と周辺文明との中間に位する文明としておいてよからう」という「暫定的結論」を得ている。けっきょく日本文明は、いくつかの点で周辺文明というよりはむしろ大文明に近い発展を見せてはいるが、大文明とは言いきれぬ側面をも残しているというわけである。しかしながら、現在、日本文明がヨーロッパ文明の周辺文明になっているという点については多言を要しまい。われわれはこの百年間にヨーロッパの制度や文物をきわめて広範に採り入れながら、まだいぜんとして土着的なものも多く保持しているからである。

以上述べてきたことを概括すれば、日本文明は中国文明の周辺文明として出発し、大文明らしい発展の様相を示しながら、再びヨーロッパ文明の周辺文明になったということになる。その意味では、時期にかなりのずれはあるにしても、ロシア文明も日本文明とかなりよく似たコースをたどっている。というのは、バグビーによれば、ロシア文明は「はじめ近東文明の、それから西欧文明の、周辺文明になったが、この一、二世紀の間に大文明の初期の段階の特徴をいくつか示しているようにも思われる<sup>53)</sup>」からである。これら二つの事例は、ある文明の周辺文明が別の文明の周辺文明になるというパターンがあることを示し、また周辺文明が大文明になるとか、逆に大文明が周辺文明になるというパターンがありうることを示唆している。事実、ヨーロッパ文明は、バグビーによれば近東文明の周辺文明として出発している<sup>54)</sup>ので、周辺文明が大文明になるというパターンに属しており、またヨーロッパ文明以外の現存するすべての大文明は、大文明が周辺文明になるというパターンを経験している。「現存している文明は、大文明であれ、二次的文明であれ、すべてこの百年以内に西欧文明の周辺文明になってしまった<sup>55)</sup>」からである。非ヨーロッパ文明でこの運命を免れた文明は一つも存在しない。

その意味では、いまヨーロッパ文明を基盤として、一つの新しい文化統合すなわち単一の世界文明が生まれつつあるのかもしれない。世界文明が成立するとすれば、現在の諸条件の下ではこれ以外の成立の仕方は考えられない。だが、念のためにいっておけば、そういつたからといって、日本文明が消滅してしまうだろうといおうとしているのではない。いったん成立した文明というものは、国家などとは違って、よほどのことがないかぎりそう簡単には同化・吸収されるとか消滅するということはないものである。おそらく日本文明は、フランス文化やドイツ文化が現在いぜんとしてヨーロッパ文明の亜文明、つまりは地域的変型として生き残っているように、世界文明が誕生しても、ヨーロッパ文明や中国文明などと共にその亜文明として命脈を保っていくことだろう。

これまで、文明の比較研究の認識＝方法論的な問題に関してバグビーが先行者トインビーの弱点を衝き、トインビーがこれをどう受け止めたかを、主として文明の定義と周辺文明というカテゴリーを中心としてみてきた。一つには、バグビーのトインビー批判はこれらの二点に集約しうると考えたからであるが、それ以外の含みもないわけではなかった。定義を扱ったところで同質性の問題や二つの文明概念の区別の問題に触れたのは、われわれの間では概してこれらの問題点が見落されがちだと思ったからである。とくに後者の場合、こうした区別はわれわれの言語習慣上、盲点に属することがらであり、意識にくい。だが、これは文明（や文化）の概念に止まるだけでなく、宗教や社会の概念をはじめ、その他の多くの概念にも妥当するものであり、その意味でこれを意識していることは、きわめて重要なことであろう。そのことによって論点の不明確さや論述の混乱はかなり除去されるはずだからである。

周辺文明というカテゴリーを取りあげたのは、これが文明の比較研究の上でバグビーの主要貢献の一つであるばかりでなく、従来の日本文化論ないしは日本文明論の欠陥を示唆し、新しい観点の必要性を示してくれていると感じられたからである。これまでの文化論とか文明論には、暗黙のものであれ、あるいは明示的なものであれ、比較軸が一つしかなかった。すなわち大文明との比較という比較軸である。われわれはこれまで、日本文明を他の文明と比較するとき、その相手としていつでもヨーロッパ文明（ないしはその亜文明のフランス文化やドイツ文化）とか中国文明といった大文明を選んできた。これも文明間の比較であるかぎり重要であることはいうまでもないが、そこで得られた結果には、周辺文明一般の特質がかなり入り込んできたろうと考えられる。とすれば、日本文明の特質の確定や位置づけにも当然狂いがあったはずである。こうした結果の再吟味や狂いの修正は、周辺文明というカテゴリーの導入をまっぴらしてはじめて可能になると期待できるが、それらの課題の解決は将来に属する。だが、われわれはいま、朝鮮文明やロシア文明のような他の周辺文明との比較というもう一つの比較軸をもつことによって、方法論的にはじめて日本文明の十全な理解が得られると予期しうる時点に立っているのである。

最後に、この論稿での筆者のトインビーの扱い方は誤解を招くおそれなしとしないので、一言弁解してこれを終ることにしよう。それというのも、ここではトインビーに不幸な役割を演じてもらわなければならなかったからである。だが、筆者の意図がこの点にあったのでないことはいうまでもない。筆者はむしろ、彼が出会わなければならなかった試練を通して、学問にたずさわる者の知的誠実や包容力の意味というものを考えてみようとしていたのである。バグビーは文明の比較研究という主題への認識＝方法論的なアプローチの仕方ではトインビーよりもはるかにするどく、この種の研究を一段と確固たる基盤にのせる上で彼が果たした役割の意義はたしかに大きい。だが、ヴィジョンの荘大さや豊かさ、洞察の深さ、そしてなによりも集団的な人間事象に関する研究の実績では、彼はトインビーには遠く及ばないだろう。多くの論者が指摘するとおり、『歴史の研究』には多くの欠陥や誤りがみいだされようが、それにもかかわらず、人間と歴史の研究の上でそれがもつ意味は、おそらく不滅であろう。

〔注〕

- 1) 本書の邦訳は、現在、山本新と堤彪の共訳によって進行中である。
- 2) 本書は完訳されている。「歴史の研究」刊行会訳『歴史の研究』全25巻（昭44—47・経済往来社）。
- 3) Toynbee, *A Study of History*, vol. XII, pp. 644—5n. 邦訳第23巻1196頁注。
- 4) Bagby, *Culture and History*, p. 181.
- 5) Bagby, 'The Study of Toynbee: A Personal View of History', in *The Times Literary Supplement*, No. 2751, 22nd October, 1954, pp. 665—6; reprinted in M. F. Ashley Montagu (ed.), *Toynbee and History*, 1956. 堤 彪訳「トインビーの研究——個人的な歴史の見方」、『トインビー研究』（『トインビー著作集』別巻・昭43・社会思想社）75—89頁所収。
- 6) Toynbee, *op. cit.*, Vol. XII, p. 63. 邦訳第21巻121頁。
- 7) Arnold and Philip Toynbee, *Comparing Notes: A Dialogue across a Generation*, 1963. 黒沢英二訳『現代人の疑問——二つの世代の考え方』（昭39・毎日新聞社）88頁。
- 8) 後半の四巻の縮冊版 *Abridgement of volumes VII—X* は1857年に出版され、1960年からは合本が出ている。長谷川松治訳『歴史の研究』I—III（『トインビー著作集』1—3巻・昭42・社会思想社）はこの合本の邦訳である。本訳書は同社から3巻本の単行本としても出ており、また5巻本として「教養文庫」にも入っている。
- 9) Toynbee, *op. cit.*, Vol. XII, pp. 1—7. 邦訳第21巻5—18頁。
- 10) *Ibid.*, pp. 573—5. 同上第23巻1064—8頁。

- 11) Bagby in Montagu (ed.), *op. cit.*, p. 105. 前掲訳書79頁.
- 12) Toynbee, *op. cit.*, Vol. I, pp. 17-26. 邦訳第1巻27—42頁.
- 13) 山本 新『トインビーと文明論の争点』(昭44・勁草書房) 13頁.
- 14) Coulborn, 'Fact and Fiction in Toynbee's *Study of History*' in Montagu (ed.), *op. cit.*, p. 149n. 堤 彪訳「トインビーの『歴史の研究』における事実と虚構」, 前掲の『トインビー研究』37頁注.
- 15) Bagby in Montagu (ed.), *ibid.*, p. 105. 同上79頁.
- 16) Toynbee, *op. cit.*, Vol. XII, p. 229. 邦訳第22巻419頁.
- 17) *Ibid.*, Vol. V, p. 23. 同上第9巻34頁.
- 18) 山本 新「トインビーの三つの転機」, 『神奈川大学人文学研究所報』No. 7 (1973), 101頁.
- 19) Toynbee, *op. cit.*, Vol. XII, p. 279. 邦訳第22巻518頁.
- 20) Bagby in Montagu (ed.), *op. cit.*, p. 106. 前掲訳書80頁.
- 21) Bagby, *Culture and History*, p. 84.
- 22) これらの定義の重要なものは大半が A. L. Kroeber & Clyde Kluckhorn, *Culture: A Critical Review of Concepts and Definitions*, 1952 に収録されている.
- 23) Kroeber, *The Nature of Culture*, 1952, p. 104.
- 24) Toynbee, *op. cit.*, Vol. XII, p. 272. 邦訳第22巻506頁.
- 25) Bagby, *op. cit.*, pp. 109 & 112-3.
- 26) *Ibid.*, pp. 162-3.
- 27) Redfield, *The Primitive World and its Transformations*, 1953, pp. IX & 30.
- 28) Bagby, *op. cit.*, p. 163.
- 29) Toynbee, *op. cit.*, Vol. XII, pp. 276-7. 邦訳第22巻513 および 515頁.
- 30) Dawson, *The Dynamics of World History*, 1957, p. 41.
- 31) Whitehead, *Adventures in Ideas*, 1933, pp. 13-4.
- 32) Bagby, *op. cit.*, pp. 103 & 114.
- 33) *Ibid.*, p. 163.
- 34) Robert F. Berkhofer, 'Clio and the Culture Concept' in Louis Schneider & Charles Bonjean (eds.), *The Idea of Culture in the Social Sciences*, 1973, p. 83.
- 35) 第一巻133頁(邦訳第1巻207頁)では二十一, 第八巻106頁(邦訳第16巻188頁)では二十一ないし二十三となっている.
- 36) 山本 新『トインビーと文明論の争点』181—2頁.
- 37) Toynbee, *op. cit.*, Vol. I, pp. 175-7. 邦訳第1巻207—2頁.
- 38) Albright, *From the Stone Age to Christianity*, 2nd ed., 1957, pp. 97-8.
- 39) Bagby, *op. cit.*, p. 177.
- 40) *Ibid.*, p. 165.
- 41) 山本 新, 前掲書193頁注.
- 42) Bagby, *op. cit.*, p. 179.
- 43) *Ibid.*, p. 168.
- 44) 山本 新, 前掲書第2章2「衛星文明への内的必然」(67—81頁).
- 45) Toynbee, *op. cit.*, Vol. XII, pp. 546-61. 邦訳第23巻1016—45頁.
- 46) *Ibid.*, p. 552. 同上1028頁.
- 47) Toynbee, *A Study of History Illustrated*, 1972, p. 72.
- 48) Bagby, *op. cit.*, pp. 169-72.
- 49) *Ibid.*, p. 169.
- 50) *Ibid.*, pp. 172-3.
- 51) *Ibid.*, pp. 173-4.
- 52) 山本 新, 前掲書第4章3「周辺文明の独立」(159—67頁) および4「日朝両文明の比較」(167—80頁).
- 53) Bagby, *op. cit.*, p. 174.
- 54) *Ibid.*, p. 171.
- 55) *Ibid.*, p. 171.